

Title	イギリスの民族舞踊：モリス・ダンスについての一考察
Sub Title	English folk dancing : discussion of Morris dance
Author	本間, 周子(Honma, Shuko)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1974
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.14, No.1 (1974. 12) ,p.41- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00140001-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イギリスの民族舞踊

——モリス・ダンスについての考察——

本 間 周 子*

序 論

イギリスの民族舞踊として古来より伝承されているモリス・ダンス (Morris Dance) について、ダグラス・ケネディ (Douglas Kennedy) の『イギリスのフォーク・ダンス——過去と現在』 (*English Folk Dancing—Today and Yesterday*) の第三章、モリス・ダンスについて調査研究し、考察を加え、現代舞踊との歴史的関連性について以下私見を述べることにする。

本 論

18世紀の文豪ジョンソン博士の有名な『英語辞典』(1755) によると、“モリス”は「鈴をじゃらじゃら鳴らしたり、棒または剣を打ち合うダンス」としている。最も権威ある『オックスフォード英語辞典』では“モリス・ダンス”と“モリス”を見ることができる。前者の項目の説明によれば、直接の語源はフランダース語 (オランダ) の“モーリスク・ダンス” (Mooriske Dance) であるとされており、その定義として「意匠をこらした服装で、通常ロビン・フッド伝説の登場人物、とくにメイド・メリアンと修道士タックをあらわす人たちによって行われた呪術的なダンス」とされている。従って風変わりな無言劇である点が重要な特徴である。この記述では、後に触れるように、現在ではロビン・フッド伝説との関係が問題となるのである。引例の初出年代は15世紀中頃の文が引用されている。

“モリス”のほうは、16世紀はじめが初出年代である。語源ではムーア人 (Moorish) ということになっている。またシェークスピア劇の中でも「激しいモリスコ (Morisko) のようにはねて」(『ヘンリー6世第二部』3幕1場365行) という語句が見られるのである。

イギリスの若者たちの踊りには、生命の更新と継承を象徴する二つの型が残っている。

* 慶應義塾大学体育研究所助教授

イギリスの民族舞踊

一つは真冬の習慣に関係したもので、もう一つは春と初夏の祭りに関係したものである。

まず春の祭りに関するものとして、イギリスで何百年間も“モリス”として知られているものがある。19世紀終わりのころまで、このダンスをする習慣は、地方ごとに行われていた。しかし人々の関心をひくことはあまりなかった。このダンスをたまたま見たり、それについて解説する旅人はほとんどいなかった。

モリスに限らず、田舎の生活や出来ごとが都会に住む人々の関心を引くことはなかった。この地方性が19世紀の間に再発見された時でも、田舎の風習や習慣は都会人にとって、風変わりな、一寸おかしいものと思われていた。このような傾向が、文学や芝居（戯曲）で非現実的に誇張されていた。

典型的な登場人物は、羊飼いの男コリドン、女フィリス、百姓の子ジャンで、彼らは髪にわらをくっつけ、野良着やスモックを着ている。美しい田舎は休日を過ごす場所になったが、田舎の人たちは総じて動物のように押しだまっていた。（田舎の人がイギリスの文学や芸術に寄与することは考えられなかった。）

やがて田舎の人の歌やバラッドが一般の人の関心を引くようになって、始めて国民的伝統の宝の発掘を待ち望むようになった。田舎を新たに訪れる人たちは、歌い手や、民俗伝統の源泉を探し求め始めた。この一人がセシル・シャープ（Cecil J. Sharp）であった。

彼はフォーク・ソングの美しさにすでに惹かれていたが、たまたまフォーク・ダンスを見たのである。彼は作曲された歌（大部分ドイツのもの）よりもフォーク・ソングの方が好きであったので、イギリスのそれを求めて田舎をさまよった。彼はブレップ・スクールで音楽の教師をしており、そこでドイツの歌を教えていた。1899年12月26日、オックスフォードの郊外ヘディントンで或る人の客となっていたおり、その近くの村クオーリーのモリス・ダンスをたまたま見た。その家の庭・雪の中で行われたのですぐノートをとり出し、ダンス曲のメロディーを記録した。そしてその曲の新鮮さと快活さに魅惑された。そのダンスは6人の男が演じており、彼らは白のシャツを着て3人ずつ二列に並び、手風琴の音楽に合わせて踊りはねたり、足踏みしたり、足の脛につけた鈴を鳴らしたり、右手にもった杖を互いにぶっつけ合ったりした。ふつうヘディントン・クオーリーのダンスをする人たちは、ウイットサンタイド（初夏の聖霊降臨節 Whitsuntide）に出てきて行う。この冬は厳しく、不毛の年だったので、彼らは生活のために金が欲しくて、それを求めて季節はずれであるけれど出てきて踊ったのである。彼らのリーダー兼手風琴弾きが、ウィリアム・キンバー（William Kimber）であった。

彼は父親からモリス・ダンスへの興味を引きついで、後にこのシャープの相談相手となった。その当時このモリス・ダンスのことを耳にした人はほとんどいなかったし、その名に出会ったり、またそれについて読んだことのある人々も、その意味を全く知らなかった。

イギリスの民族舞踊

それから半世紀以上たった今日、モリスはヨーロッパに共通する古い田舎の慣習的民族舞踊のイギリス版であることがわかってきた。オックスフォード郊外の多くの他の村にもこれと同じモリス・ダンスを行っているグループがあったが、この100年間にその数は減っている。現在行われている所は、

1. ヘディングトン (Headington)
2. バンプトン・イン・ザ・ブッシュ (Bampton-in-the-Bush)
3. アビンドン (Abingdon)
4. チッピング・キャムデン (Chipping Camden)

これより遡ると、オックスフォード近郊のアダベリ、エインシャム、イルミントン、ロングボロー、ブレデントン、バックネル、シャーボン、フィールドタウン、バッドビ、ブラックリー (Adderbury, Eynsham, Ilmington, Longborough, Bledington, Bucknell, Sherborne, Fieldtown, Badby, Brackley) で行われた。

またそれより以前になるとコッツウオールド (Cotswold) 台地のあらゆる村で、このダンスが行われていたという印象をうける。

セシル・シャープは、すべての村のモリス・ダンスとダンス曲を記録し『イギリスのモリス・メン』(*Morris Men of England*) (1903—13) 5巻を著わした。そのどれにおいても、次のようなはっきりした特徴がある。ただし一般的特徴として、ステップやダンスの曲にも共通したところがあるけれども、このコッツウオールドのモリス・ダンスを1899年に始めて見たシャープの関心は、男たちがお互いに踊り合っているということと、彼らの軽やかさと優美さに強くひかれたのである。彼らのダンスのある箇所では、彼らは巧みなステップでゆらす鈴の音に合わせて、白いハンケチを振っていたけれども、彼らは決して女性的には見えなかった。それとは逆に、シャープはこの強度に男性的な態度、振舞いの背後に真剣な目的があるという印象をうけた。

その当時彼は、どれ位このダンス儀式が、ヨーロッパ各地の辺りな所でなお発見され得るかということが全くわからなかった。

『ザ・モリス・メン・オブ・イングランド』の中で自分の記述や、ダンス記譜法を公に発表すると、これに種々の反響があって、服装やダンスの動きや、踊り手に関する手紙が彼のところに到着し始めた。そして次のようなことがわかりだした。シェークスピア時代、一人バンド、つまり一人の男が笛や小太鼓を奏するのが普通であった。それが時代と共に手風琴にかわっていったと考えられる。

また、ピレーネ山脈の麓のスペイン側とフランス側に残っているバスク地方の伝統の春のおどり (medicine dance) は、イギリスのモリス・ダンスに酷似しているということである。これ

らのバスク人もまた花、リボン、鈴で飾りたてた白い服を着て、一人の男が笛を吹き、彼の叩くドラムの音に合わせて、とんだり、はねまわったり、白いハンケチを振ったり、木の棒を叩いて踊ったりした。やがて同じような男たちの踊りは、適当な季節に、ルーマニア、ブルガリア、モンテネグロ、セルビア、ギリシャ、ポルトガル、スペインとフランスの幾つかの地方、オーストリア、ハンガリア、ボヘミアなどでも発見されたのであった。これらのヨーロッパのダンシング・メンの比較研究は、彼らのことがすっかり研究しつくされ、記述によって証明されるまで不可能であった。シャープ自身は、この問題の先駆者であって、ほとんどゼロから出発して、イギリスでの彼自身の研究と解釈をしてゆかねばならなかった。彼の書いた5巻本につけた序文は、彼の経験が増すにつれ大きくなった背景を巧みに記している。この序文だけが今日その本を価値あるものになっている。私たちは彼が工夫した踊りの表記法の巧妙な方式については、シャープのお陰を今なお蒙っている。彼は他の人たちに教えたり、そのダンスに関してはっきりと論議できるようにするために新しい語彙を作った。そして彼の専門用語の大部分はキンバーから拾い集めたものであった。ところでキンバーなる人物は一体どういう人間であったか。

キンバーは秩序だった分析的な精神の持主であったが、それは歌をうたうことや、鈴を鳴らすことのような、おだやかな修練によって鍛えられたものであった。キンバーが父親や祖父から学んだものは、いろいろな職業が中世からギルド（同業組合）を通じて伝えられたように、昔から伝えられたテクニックであった。

モリス・ダンスの起源については二つの有力な説があるが、いずれにしても文献以前の時代に遡ることになるので推測に基づく仮説であることはいうまでもない。第一の説は、古代ゲルマンのソード・ダンス（Sword Dance）という考えであるが、後述する通りもっと遡ることができるように思われる。

第二の説は、“モリス”（Morris or Morrice）という単語の語源から出た考えで、ムーア人の踊りということで、顔を黒くぬることが関連している。ところがイギリス演劇史の大家E・K・チェンバース（E. K. Chambers）は『中世演劇』（1903）においてこの説をしりぞけ、顔を黒くぬるのはムーア人をあらわすために行うものにすぎず、このような習慣は原始宗教的な供物の火の灰で顔を黒くぬるきわめて古い異教の儀式によるものと考えた。踊り手も道化も共に原始的な礼拝者とみなされている。本論でもこの考え方を支持する立場から、起源に関する問題と内容を以下に記すことにする。

文献以前に存在したと思われる秘教の社会では、キリスト以前のヨーロッパの生活を条件づけた、あるいは絶対必要だった呪詛宗教を行っていた。このダンスの目的と使用場面を知るためには、もっとくわしく古代社会においてダンスが行われていた事情を調べなければならな

イギリスの民族舞踊

い。ここではイギリスその他の諸国の春の風俗と習慣について、シャープの時代以来手に入れることができた情報・知識が役にたつ。陰鬱な冬がすぎ、心地よい季節を迎えるヨーロッパの春の祭りの習慣についての新しい資料を少し調べただけでも次のようなことが明らかになる。

そこでは我々は宗教上の儀式の少なくとも一つの巨大なきっちりと組みたてられた様式の、幾つかの断片を扱っているのである。

若い踊り手の集団はドラマの役者の一団でもある。彼らは単に役者であるだけで、主役ではないのである。スターは新しい宗教（キリスト教）が勢力をもったとき舞台を去らなくてはならなかった。踊り手たちがなお古い呪いダンスを続けている間に、主役という存在は陰の存在になってしまった。モリス・ダンサーが役を演ずる聖霊降臨節の風習では、オックスフォード州に、ウイチウッドの森の「ウイト・ハント」(whit-hunt) というのがある。鹿が狩りたてられて殺され、その肉はモリス・メンを含む祭りで儀式的に食された。森から遠い村々では、小羊を犠牲に使い、一日中行列のダンスを行った後、ダンサーがそれを殺して食べたのである。ダンスのリーダーはその頭をとるのである。モリスのリーダーは権威があり、彼の言うことは法律になったからである。彼の役割りは、クラウンないしフル（道化）を含んでいた。その他にもキャラクター（登場人物）がいて、ホビーホース（ダンサーが腰につけて踊る馬の像）とアニマル・メン（Animal-men）は踊り場に入ることが許されていた。こういった役者に相当するものは、コッツウオールド・モリスでは消えさってしまったらしい。それに代って、若者の踊り手が表面に出てきたと思われる。

モリス・ダンスはコッツウオールドのほかにも別の型があり、ダービーシアにあるものは16人の踊り手、主人、女主人、道化、黒い顔の魔女より成る。ポルトガルのミランドラの棒ダンサー（Stick dancer）は白い衣装、動きやステップの点では大変似ているが、みなスカートをはき男装をした女性である。

ルーマニアのカルサリ舞踊手（Calusari dancer）も白いドレス・飾りたてた帽子などで、モリス・ダンスと似ているが、彼らのダンスは気晴らし程度の単純な踊りではない。それは動物のマスクをつけた道化が遊びたわむれている間、踊り手はマスクを蒸留し、それを人々や、場所の上にふりまくるのである。そして異教のレント期間に（四旬節、キリストの荒野の試練を記念するため、断食や贖罪を行う）行い、死を払いのけるため人をつかまえ、こん棒で足の裏を打つのである。

病人に対しては特別のダンスが行われる。病気の赤ん坊は母親から踊り手に手渡されると、彼はその子を抱いて踊る。次にその子を地面においてその上でステップをふんでおどり、そして子供を取り上げて母親に返す。カルサリの棒ダンサーは人々に半ば尊敬され、妖精（魔力を持った伝説的神秘的存在）のように見なされていた。マケドニア（ギリシャ）のディエヴ・チャリ

イギリスの民族舞踊

のルサリー・ダンサー (Rusalii dancers) もまた妖精である。

その最初のダンスは一行に並んだ行列ダンスで、新月刀 (Scimitar, アラビア人, ペルシア人が使う三日月形の刀) をふりまわすのである。カルサリーやルサリーではまた、その中に同数の未婚の女性が加わり、チェイン・ダンスをすることがある。そうすると彼女らは一年以内に結婚することになるといわれている。これらの季節に関係するダンスの背後には、父なる神, 母なる女神, 豊穣に献げられる宗教が介在している。これがインドからスペイン, ポルトガル, さらに大西洋を渡って中央・南アメリカにまで及んでいるが、そこではポルトガル人や, スペイン人は自国の民族伝統とキリスト教とをまぜあわせている。

イギリスの場合, モリス (Morris or Morrice) という名前がなぜつけられているのか推定する以外にはない。学者の中には, この語はラテン語のモレス, スペイン語のモリスカ (Morisca) に由来するという人がいる。つまり中世にスペインを一時占領した北アフリカのムーア人を指すというのであるが, イギリスのモリスが, モロッコからきているというのは信憑性に欠けるように思われる。スペインのモリスカは, 男のダンス儀式である。それは白と黒 (あるいは赤) 二者間の劇的葛藤である。その土地ではムーア人とキリスト教徒との争いを意味するのであるが, これは生と死の戦いとも考えられよう。

北西部イングランドのランカシャーには, バックアップ・モリス・ダンス (Bacup) というのがある。踊り手は顔を黒くぬる。ダンサーがマジックを行うためにここでは馬の鞭を振るダンサーが踊りのリードをする。彼らは木靴をはき, また木のディスクを手のひらや, 膝につける。それはこの地方のカーニバルの祭りの影響を受けているであろうが, 変装のために顔を黒くぬり, 儀式の役者となることは石器時代から伝承されている方法であるといわれる。コッツウオールド・モリスも昔はそういう変装の方法をとっていたが, これはソード・ダンサーや, ママーズ (無言仮装劇の役者) の冬の風習でのマスクや仮面をつける変装に相当するであろう。この変装が, モリスという名前を春のダンスの風習に使用したいわれであろうと思うのである。シェークスピアが述べた「激しいモリスコのようにはねる」という“モリスコ”は, イギリスのウイットサン・ダンサーに当るものであろう。ウイットサントイド (Whitsuntide) に行うダンスはかなり昔に確立されたものである。

結局この宗教舞踊は, インド・ヨーロッパ民族の風習・信仰で, キリスト教以前の文化に見られる一要素をなしている。中・南米に伝えられたアメリカ原住民のダンスでは, アメリカ的・アフリカ的要素がつけ加えられているにしても, 本来の要素は白い服, ひらひらさせるリボン, 鈴, 白のハンケチ, 木の棒をならすことなどによってそれが一目瞭然にわかるのである。ただここでは白衣のダンサーが聖母マリアとキリストのエスコートになっている。

異教の儀式の目的は人を古い殻から脱せしめ, 生命や力と新しい関係をもたせるものである。

イギリスの民族舞踊

る。このダンス・ドラマによって人間は、大自然の死と再生のしくみ、個人の犠牲などを表現することができる。

異教とキリスト教との混合は、ブラジルのフォーク・ダンス祭の中に見出せる。その行列で印象的だったのは、聖母マリアの像が白衣の男ダンサー（輝く塔のついた小型教会のような飾りをつけた帽子をかぶっている）につきそわれていたことであった。彼らの後には、牡の子牛のように変装したアニマル・メンが従っていた。これはスペインあたりのカトリックの影響のように思われる。

イギリスのモリス・ダンスはキリスト教に全く適応しなかったが、ローマや、カンタベリーの宗教上の禁令の被害を蒙っていた。宗教的には古い農民の風習は無害で、人々のエネルギーのはけ口として許され、教会もみとめていた。しかしヨーロッパの祈禱舞踊（豊穡の舞踊）には深く根ざす迷信がつきまとい、それには牧神のようなアニマル・メンや、ひわいなゼスチャーをする女役が出てきて教会内のうるさい連中のひんしゆくを買ったとされている。

このような農民の伝統的なあそびや楽しみを攻撃したのは17世紀共和制下のピューリタンであろう。ピューリタンがダンスをきらい、こわがった表れは、北米の南部諸州でつい最近まで「ダンス」の代りに「ゲーム」とか、「プレイ」という言葉を使わねばならなかったり、南米で「スピール」を使っていたことにその一端が認められる。また笛やヴァイオリンは悪魔の道具ということで、それらを使用するのをいやがるところがまだ見受けられる。

スタフォードシアのアボッツプロムレイの「ホーン・ダンス」(Horn Dance)は豊穡のメディシン・ダンスの一例で、古代から伝えられているものである。しかしこれが存続しているのは、それをコントロールするその土地の教会のお陰であった。ここでは役者とダンサーのバランスは等しく保たれている。

この儀式は二つの部分、すなわち行列とある場所で行うダンスより成る。行列は一列につながり、行列の先頭には6人のアニマル・メン（動物の姿をした男）が立ち、3人は白くぬったトナカイの角をもち、その後につづく他の3人は、黒くぬった角をもつ。そして更にその後には道化、ホビーホース、メイド、マリオン、少年ハンターが続く。この行列は蛇のようにうねってゆく。3人の白角は小さな輪を作り、もう一方の3人の黒角も反対側に輪をつくり、この二つの輪が横切ったり、まざったりせず互に回転し、そして輪がとけて一列になる。一定のところではダンスをするときは、リーダーはつながりを広げて一つの大きな輪を作り、3人の黒角は、3人の白角と向かい合い、道化とホビーホースは、マン、ウーマンと少年ハンターと向き合う。そしてこの二列は、前進したり後退したりして鹿の角を持った男は、その角で相手側を叩く。次いでその列は横切り、これをくり返す。そしてもとの位置に戻ると、リーダーを先頭に立て、また順序よくつながるのである。

イギリスの民族舞踊

以上、モリス・ダンスをまとめてみると、次のようになる。

基本的な要素としては踊り手は男だけで通常6名、両足に鈴をつけ、さらに場合によっては禱がけのように身体にも鈴をつけ、両手に白いハンケチ、あるいは短い棒をもっている。伴奏音楽は伝統的に笛と小太鼓、あるいはバグパイプを使用し、リーダー格の人物が一人で行うものとされている。

近頃はヴァイオリン弾きが加わっている。

更に踊り手と共に劇的な要素をもった道化やホビーホースが参加する。5月にはジャック・イン・ザ・グリーン、ときにはこれにドラゴンや娘メアリアンが加わることがある。

北国では5月はいやな冬が終わり、暖かなよい季節を迎える時期に当たるので、その率直な生の歓喜が歌や踊りなどに表現されている。

モリス・ダンスは中世の義賊ロビン・フッドとその手下どもとやがて結びつく。ロビン・フッドは中世のバラッド (ballad) で物語られ、芝居にもなって、今日にいたるまで一般によく知られている。このダンスは黙劇 (mumming plays) の重要な一部分ともなっている。イングランド・スコットランド全域にわたって盛んになり、16世紀前半のヘンリー8世時代が全盛期であった。また宮廷でも行われたことがあったが、これが急速に衰微したのは前述のようにピューリタンの影響が強かったためであろう。

18世紀末には、イギリス中部地方リンカンシャーのリヴスビー (Revesby) で、モリス・ダンサーが演じたフォーク・ドラマがあった。登場人物は道化とその4人の息子たち、その他から成るものであった。細々ながらモリス・ダンスの伝統が田舎で伝えられ、とくにオックスフォード州がその点で重要な地域であった。シャープなどの再評価により今世紀に入ってから各地で復活し、季節のよい時、イギリスのフォーク・ダンス協会の援助によって行われている。

6月にイギリスの地方を旅する者はそれを目撃する機会に恵まれるであろう。

結 論

モリス・ダンスについて考察を試みたのであるが、舞踊の発生が人間の生活と共に始まったと考えられるように、この舞踊も、イギリスの古代民族の生活の中から、彼らの息吹きが永い年月の間に形象化されたものと考えられるのである。

そこには神秘的なものへの憧憬や願いがあり、哀歓が凝縮されて見事に結晶されているとさえ思われるのである。

大学体育においてもこの古代舞踊の発生的背景を理解し、それらを育ててきた自然と精神的風土を感じとることによって、民族舞踊の本質に一層深くアプローチできるのではないであら

うか。

このような古代舞踊を実践を通して再現することはむずかしいかもしれないが、時にはその再構成の過程の中で、古代の心に触れることも意義があるのではないかと思う。

そのような観点から、このモリス・ダンスの系譜について一段と研究を深め、これらの古代舞踊のもつ現代的意義についてもこんごの研究を通して認識を深めたいと思うのである。そして、そのことが現代の心ある若者たちの精神に、民族の感性の中にあたためられた伝統の力を感じさせられればと、ひそかに願っている。

参考文献

1. E. K. Chambers, *The Mediaeval Stage*, 2 vols., Vol. I, Oxford University Press, first edition 1903, reprinted 1963.
2. Phyllis Hartnoll (ed.), *The Oxford Companion to the Theatre*, Second edition 1957, Oxford University Press.
3. Douglas Kennedy, *English Folk Dancing; Today and Yesterday*, London: G. Bell and Sons 1964.
4. John Bartlett (ed.), *A Complete Concordance of Shakespeare*, London: Macmillan. first edition 1894, reprinted 1965.
5. 邦正美著「舞踊の文化史」岩波書店, 1968年。
6. 岸野雄三著「体育史」大修館書店, 1973年。
7. 前川貞次郎著「世界史」数研出版, 1967年。
8. 大森志郎著「歴史と民俗学」岩崎美術社, 1973年。

(本稿は昭和49年度慶應義塾学事振興資金による研究である。)